

若者への福祉教育研究会報告書

**次世代の共生力を育むための
福祉教育実践プログラム集**

埼玉発！

草の根からのプログラム

《ダイジェスト版》

赤い羽根共同募金の

助成を受けています。



発行：若者への福祉教育研究会

発行日：2018年8月

MAIL wakafukuken@gmail.com

HP <http://wakafukuken.wixsite.com/saitama>

(報告書は、HP からダウンロードできます)

FB <https://www.facebook.com/wakafukuken/>

若者への福祉教育研究会とは

代表 横田八枝子

本会は、テーマを「わかもの」とし、埼玉県内の福祉教育実践プログラムの創出・実践・普及に向け、福祉教育実践者と研究者が7つのプロジェクト（高校、大学、あったかウェルねっと、ワークキャンプ、精神保健、施設、調査等）がチームを組んで研究している。今後は、報告書を活用して、福祉教育実践の波及や、研究者の広がりへ繋がるようお願い、研究を継続していく。

目的

2025 年に向けて、若者の「共に生きる力を育み、社会福祉意識を創り出す「サービスラーニングプログラム」の創出・実践を行い、広くそのプログラムを発信・普及します。そのために、現在、埼玉県で「彩の国福祉教育・ボランティア学習推進員ネットワーク（通称：あったかウェルねっと）」や市町村社協で実施されている福祉教育実践をプログラム化し、研究者と共に実践を検証します。さらに、埼玉そして日本に住む若者が、「共に生きる力」を身につけ、安易な自立観ではなく、相互実現的自立の視点を持ち、社会の一員として自分らしく歩むための福祉教育実践について、ネットワークを構築しながら研究し、地域共生社会の実現を目指します。

研究のコンセプト

「若者が主役の共に生きる力(共生力)を育む」
～生活者の視点を持った若者力が日本を支える～

研究の目標及び効果

- (1) 埼玉方式で若者の共生力を育む《実践プログラムの創出・ブラッシュアップ》
- (2) 地域で若者の社会福祉意識を醸成する《相互実現的自立と地域力アップ》
- (3) 福祉教育実践者、地域活動者、教育関係者、行政関係者、企業等がチームを組んでの協働実践で新しい仕組みづくり《新しいつながりとネットワークの強化》
- (4) 埼玉県内の福祉教育実践プログラムのブラッシュアップに取り組み、全国へ発信・普及する。《若者及び実践者の人材育成》

設立の会

2016 年8月10日 (水)

多分野で活躍の方々と

若者への福祉教育研究会は、福祉教育へ興味・関心のある多数の方に賛同いただき設立しました。当日は発足宣言、来賓の挨拶、研究会趣旨説明や活動予定に続いて、出席者全員からの自己紹介があり、賑やかに研究会がスタートしました。また、アドバイザーの原田正樹氏・河村美穂氏・村上徹也氏 による鼎談「埼玉発！若者への福祉教育とサービスラーニングの意義」では、これからの研究への助言や提案がありました。

活動は、報告書 P90～P100 に記載

研究会

学習会

わかもの青年部

埼玉県内福祉施設への調査

2. 地域の人（支援者）によるプログラム：ダイジェスト版【報告書 P51 より抜粋】

スポーツでの交流体験を活用した福祉教育実践 ～精神障害者フットサル活動での学生ボランティア導入～

実践者：埼玉ソーシャルフットボール協会（埼玉カンピオーネ）岡田 隆志

アドバイザー：東京国際大学 松本すみ子

背景と目的（抜粋）

精神疾患により通院する患者が300万人を超える状況が続く中、厚生労働省は、がんや糖尿病と並んで精神疾患を国民の5大疾病に加える方針を決めた。（2011年）。以前に比べ、精神疾患治療へのアクセスはよくなり、精神障害者へのサービス提供も増加してきているが、いまだに精神障害者に対する世間の誤解や偏見、差別は残っている。2008年、精神障害者の社会参加の促進とともに、地域社会におけるソーシャルインクルージョンに貢献すべく、埼玉県に精神障害者フットサル活動を企画運営する団体を組織。障害がある者となない者がフットサルを通して、相互理解を深めていくことを進めている。学生には運営補助だけでなく、精神障害者との直接的なかかわりの機会を提供する福祉教育としての実践を行ってきた。本稿ではその実践方法について報告をする。

本プログラムの目的（抜粋）

本プログラムの目的は、学生に継続的な交流体験を経験してもらい、自身の意識、態度、行動に変容をもたらしながら、障害の理解を深めてもらうことにある。ただし、障害理解とは、精神障害者のイメージを否定的なものから肯定的又はプラスなものに変化させることだけを指してしているのではない。彼らの障害者観を固定化させることなく、多様でかつ柔軟性がある理解、つまり個別性の理解につなげていくことを意味している。

- （1）自分自身を見つめなおす
- （2）精神障害者へのイメージを再構築する
- （3）自身の身を地域社会に置く



プログラムの提案（抜粋）

○予想される効果・注意点など

福祉教育において疾病性に偏りを持たせてしまうことは、「精神障害者」としてのカテゴリー理解やイメージへの誘導が懸念される。精神疾患の疾病特性ではなく、「その人」への理解促進をどのように福祉教育プログラムに仕込んでいくかが、学習効果を大きく左右する。そもそも、その人の置かれている状況や環境によって、生活のしずらさや生きがいは異なってくる。これは、対象の如何を問わず、福祉教育実践の根幹をなす基盤としての視点であろう。「その人」への理解を促進するプログラムを展開することで、高齢や障害を含めた生活福祉課題をもつ人たちが、必ずしも苦しみや困難の中でのみ生きているわけではなく、将来への思いや人生への期待を抱いている姿や、日々の生活の中で楽しみや生きがいを持ちながら生きている姿が観えてきやすくなる。多様な他者理解や深い人生への洞察を促すことも可能となろう。そうした他者の存在と生き方への気づきを自身と相対化させる作業を丁寧な促すなかで、福祉教育を通じた人間成長を促進することも期待できよう。

【2. のプログラムは、報告書 P30、P33、P36、P39、P42、P45、P48、P51、P54 にあります。】

1. 当事者発信のプログラム：ダイジェスト版【報告書 P8 より抜粋】

～発達凸凹の部屋へようこそ～

発達障害についての理解と寄り添うための工夫を考えるプログラム

実践者：ふくふく木曜会 櫻井 栄里

アドバイザー：埼玉大学教授 河村 美穂

背景と目的

最近発達障害と診断をされる人、発達障害ではないかと思われる人が増えてきました。しかし発達障害者が増えているわけではありません。発達障害についての情報が拡散されるようになり、医療機関にかかる人が大人も子供も増えているためだと思われます。ところがその情報の中には偏ったり誤ったものも含まれており、誤解や偏見を生んでしまっています。その誤解や偏見を解くために、まず自分の実体験をもとに作成した資料を使い、当事者が抱えているいろいろな思いや困難を知ってもらいます。発達障害の言動は一言では表せない位沢山の表れ方をします。障害名でタイプを決めつけるのではなく、きちんと一人一人を見てほしいことを伝えます。そして発達障害に限らず多種多様な人々の中で、相手に寄り添うためには自分に何ができるのかを考えていきます。

本プログラムの目的

- (1) 実践者の様々な体験を聞き、当事者が抱えている現実を知る。
- (2) 発達凸凹カードを用い一緒に活動するためにはどんな工夫が必要かを考える。
- (3) 相手の立場に立って、その工夫が適切なものかどうかを考える。

プログラムの提案

目の前の人に寄り添い多様性を認め合おう (抜粋)

最近では町を歩いていてもいろいろな人達とすれ違います。出身国の違う方、ハーフの方、LGBTの方、病気や障害を抱えている方、家庭のことで悩んでいる方、シングルマザーの方など、すれ違うほとんどの方が何かしらの思いを抱えておられます。こんなに多種多様な人々が町にはあふれているというのに、抱えている悩みは理解されないことだったりもします。そんな時代だからこそお互いに寄り添い認め合うことが大切で、発達凸凹カードを使って考えることが気付きのきっかけになると思います。

～伝えたいメッセージ～

発達凸凹は生まれつきの脳機能の障害と言われています。

アスペルガーや ADHD は、多くの場合単独ではなく、100 人いれば 100 通りの表れ方をするように、複雑に絡み合って様々な人格を作り出しています。病気ではないので治療という言葉は合いませんが、周囲の理解とサポートにより、その人その人にあった支援があれば、凸凹が大きくても自分らしく生きていけると思います。

私たちは全てを理解してほしいとは思っていません。しかし、理解しようとする努力はしてほしいと思っています。そして、いろんなタイプの人がいるということを知ってほしいと思っています。障害のあるなしに関わらず、すべての行動にはそれぞれ意味があります。

お互いに相手をわかろうとする『たずねる』『答える』『知る』という事の重なりで、人とのつながりは出来ていくと思います。

他の人たちと違うからと言っておかしいと思う前に、「なぜなんだろう?」「何に困っているんだろう?」と考えることで相手を理解する一歩になるんじゃないでしょうか?

【1. のプログラムは、報告書 P8、P11、P14、P17、P20、P23、P26 にあります。】

3. 施設の人によるプログラム：ダイジェスト版【報告書 P70 より抜粋】

子ども達と入居者にとって新たな気づき生まれる交流 ～小学生と高齢者のふれあいプログラム～

実践者：特別養護老人ホームみどりの風 嶋野博之

アドバイザー：埼玉大学 河村美穂、日本社会事業大学 菱沼幹男

背景と目的 (抜粋)

福祉の心を育む交流事業では、子ども達が施設で高齢者と交流を図ることにより高齢者への理解を深め、自らの活動が、ポジティブな変化を生むことを体感することにより、福祉の心を育むことを目的としている。また、交流の場は高齢者が子ども達の教育者として活躍の場となる可能性がある。子ども達と高齢者の双方にとって、価値のある事業として成り立つプログラムの構築を目指す。

本プログラムの目的 (抜粋)

- (1) 小学生が高齢者と接する機会を作る。認知症高齢者への理解。
- (2) 入居者にとっても、主体的に参加することにより社会貢献や社会交流の場とする。
- (3) 施設で活動を通して、施設と地域住民との距離を近くする。

まとめ(考察) (抜粋)

事前学習は、〇×のクイズ形式で行った。クイズ 毎に写真などを使い、施設での生活の様子を紹介する。クイズを進めていくうちに、最初は、高齢者を何もできない存在であると思っていた子ども達が、徐々に高齢者をいろいろなことが出来る方たち、とても力がある存在であると認識が変わっていくことを感じた。最後の問題の「みどりの風鶴ヶ島のおじいちゃん、おばあちゃんは、お年寄りなので自分で出来ることは何もない。」では、ほぼ全員の子供たちが、“出来ることがたくさんある”に手をあげていた。また、高齢者の方、とくに認知症を患っている方とのコミュニケーション技法についても取り上げ、実際の活動時の注意点などを伝えた。

プログラムの提案 (抜粋)

《交流事業は子ども達の学習の場であり、高齢者の活躍の場である》

＜プログラムの流れ＞

- 1、学校側との事前学習、交流事業の打ち合わせ
- 2、利用者と事前の打ち合わせ、交流後の振り返りを行う。
入居者に交流事業の趣旨や事前学習の様子などをお伝えする。
子ども達の福祉教育の為に皆さんの力が必要であることを説明する。
交流後、うまくできたこと、うまくできなかったことを聞き取る。

3、事前学習の実施

45分の時間で事前学習を行う。クイズ形式で特養とはどんな場所なのか、入居者はどのような生活をしているのかをお話する。事前学習の際に高齢者とのコミュニケーション技法についてお話をする。目線を合わせて聞き取りやすいようにはっきりとお話することをしっかりと実践していた。事前学習の成果として、一方的なコミュニケーションではなく、会話のある交流が出来ていた。



【3. のプログラムは、報告書 P58、P61、P64、P67、P70 にあります。】

4. 高校大学教員によるプログラム：ダイジェスト版【報告書 P74 より抜粋】

「地域福祉のインフォーマルな資源を目指す」 ～地域福祉活動を知る・実践する経験を通じて～

実践者：筑波大学附属坂戸高等学校 熊倉悠貴、横瀬友紀子

アドバイザー：埼玉大学教授 河村美穂

背景と目的

本校では、2・3年次生から生徒自身が興味関心に応じた科目選択を行う。ここで紹介するプログラムは、主に生活科学と福祉についての科目を中心に選択している生徒に向けた選択科目「福祉からみた生活」における実践である。「福祉からみた生活」は、2年次生の選択科目「福祉入門」において、福祉が自分にとって身近なものであるということを学習した生徒が3年次生になって選択する。福祉を通じて地域へ主体的に関わる実践的な取組を行い、そこから主体的に関わるとは何かを学んでほしいと願っている。

専門職育成ではなく、地域に暮らす一人としての意識を芽生えさせ、今後生徒が地域で活躍する住民になるための第一歩としたい。実際に地域で活動している人たちと出会い、そこから学び、実際に生徒自身が主になって活動するという体験をするなかで得る学びを大切にしたい。

本プログラムの目的

- (1) 地域に暮らす一人としての意識を芽生えさせる。
- (2) 自分の地域、地域福祉活動について知る。
- (3) 活動者との触れ合い、活動企画・運営を通じて、学んだことを他者に伝える力を育む。

プログラムの概要(流れ) (抜粋)

	テーマ	授業タイトル	内 容
4・5月	①地域福祉、 地域福祉活動について知る	- 科目ガイダンス - 住民・市民参加の地域福祉 - 身近な地域福祉活動 - 市民の手で作る福祉コミュニティ	- 地域社会の崩壊と地域福祉についての講義 - 自立の要件、重層的な福祉圏域、ソーシャルサポートネットワークについての講義 - 自分の住む地域の福祉活動について調べ学習 - VTR視聴：NHKスペシャル「無縁社会の衝撃」 - 住民参加の意義、U-加がバカ、社会資源についての講義
6・7月	②活動に向けて準備する	- 活動へ向けた準備 - 企画を見てもらおう	- 生徒同士でグループ作り、企画立案、活動計画書作成を行う - 地域での活動者を招き、企画した内容について意見をもらう。これからの活動計画に活かす
9月～11月	③活動する・地域と関わる	- 各グループでの活動を進める - 活動報告会	- 教員は、こまめに面談を行い、進捗状況や困りごとについてサポートする - 各グループの活動を学習者全体で学びを共有する
12月～1月	④活動・学習を振り返る	- 報告書作成 - 総括	生徒は報告会をふまえ、学んだことを文章にしてまとめる。ここまでの学習全体を振り返る

【4. のプログラムは、報告書 P74、P77、P80、P83 にあります。】

【福祉教育実践プログラム】

1 当事者発進のプログラム

櫻井栄里	～発達凸凹の部屋へようこそ～ 発達障害についての理解と寄り添うための工夫を考えるプログラム
中島満	車イスを使っている人の普段の生活 ～知ってほしいこと～ ～考えてほしいこと～
吉田より子	見えないなら、両手でさわってみよう。声をかけてみよう！
初雁健司	地域共生社会の実現をめざすサービスラーニング学習プログラム
暖花	「自閉っ子の頭の中」発達障害と精神障害を題材に『知らない人生を知る』プログラム
中里由架利	伝える・伝わる知的障害疑似体験 ～自分の生活に引き付けるコミュニケーションの気づき～
奥野真由	難病当事者としての語り ～経験を伝え、これからを共に考えるプログラム～

2 地域の人(支援者)によるプログラム

倉持尚美	～小さくあたたかい命に触れ“いのち”を感じる～「“いのち”の授業」学習プログラム
須田正子	自己肯定感を高める「ふんわりパステル画」～心に力を与える色彩～ 中学3年生と地域の方々とのふれあい体験授業プログラム
藤原由紀	発達障害と共に生きる～心をつたえる～
木村房枝	認知症理解
木口真理子	主体的に考え、ふだんの生活に生かすHUG(避難所運営ゲーム)プログラム ～防災教育からつながるふだんの生活へ～
木口真理子	サービスラーニングの視点を用いた車いす体験プログラム
江森孝夫	幸せについて考えよう～福祉教育を通じて、自分の生き方を学ぶ～
岡田隆志	スポーツでの交流体験を活用した福祉教育実践 ～精神障害者フットサル活動での学生ボランティア導入～
小川和広	地域で取り組む社協ワークキャンプ実践プログラム

3 施設の人によるプログラム

小池真由美	多感な中学生の心を揺らす職場体験
小池真由美	尊厳と社会連帯の意識を高める教員養成のための『介護等体験』
北原亮	障害者福祉への入り口づくりに向けての実践
平澤祐介	次世代育成を視野に入れた介護等体験
嶋野博之	子ども達と入居者にとって新たな気づきが生まれる交流 ～小学生と高齢者のふれあいプログラム～

4 高校大学教員によるプログラム

横瀬友紀子	「地域福祉のインフォーマルな資源を目指す」 ～地域福祉活動を知る・実践する経験を通じて～
柳澤智美	ボランティアとキャリア教育
牧野郁子	若者が主体になるボランティア活動～実践をととして社会や人を知るプログラム～
川田虎男	「地域と出会い、地域を知る」聖学院大学コミュニティサービスラーニング活動前事前学習プログラム

研究報告

武藤政世	教育委員会との協働実践研究プロジェクト
------	---------------------

報告書を読んでもいただくために（報告書活用方法より抜粋）

埼玉大学 河村美穂

「福祉教育実践を書き表すということ」

この2年、私たち研究会ではそれぞれの分科会において、また皆で集まって、福祉教育実践を聴き合うということを行ってきました。そこでは、実践の様子が書かれた報告を見ながら実践者の思いや振り返りを聴くことを大切にしてきました。その中でわかったのは、実践の真の目的や、実践者の熱い思い、そこで起こった思いがけない成果など、聴いてはじめてわかることがたくさんあるということでした。このことは、リアルな実践の様子を報告として書き表すことは大変難しいということを感じたということでもあります。

それでも、実践を書き表し、聴き合い、尋ね合って、より理解し合うという営みを続けてきました。さらに、本研究会の当初の目的は、「よりよい福祉教育実践を創り出し、埼玉発のこれら実践を広く全国の方にも試して、新しい福祉教育実践を創り出していきたい」ということでした。そのために、難しいことを承知の上で私たちの実践を分かりやすく報告し、提案することをこの2年間の研究会のまとめとして取り組みました。

「福祉教育実践の共有と改善」「みんなで取り組む福祉教育実践」については報告書に記載

「実践報告をどのように活かすか」

実践報告は、同じような実践を志す方を元気にし、「私もやってみよう」という気持ちを支えることに意味があると思います。私たち自身もこの報告を書くことで自分たちの軌跡を確認し、元気になることが出来ました。さらに、この報告書を読んでもくださる方たちとの交流が生まれ、一緒に福祉教育実践について語ったり、福祉教育実践を共に創り出すことができれば、これ以上の喜びはありません。

若福研アドバイザー名簿（敬称略）

氏 名	所 属
原田 正樹	日本福祉大学
河村 美穂	埼玉大学
佐藤 陽	十文字学園女子大学
松本すみ子	東京国際大学
諏訪 徹	日本大学
菱沼 幹男	日本社会事業大学
大島 隆代	早稲田大学
柳澤 智美	城西大学
相川 章子	聖学院大学
横瀬友紀子	筑波大学附属坂戸高校
牧野 郁子	鶴ヶ島市社会福祉協議会
村上 徹也	日本福祉大学